探究的な学習の在り方に関する研究推進地域

連携中学校区：　宮島中学校区

連携地域を構成する学校

学校名	学級数	児童生徒数
宮島小学校	7	96
宮島中学校	4	46

（R5.12.1現在で記入）

１　研究の概要

（１）研究テーマ及び研究のねらい

宮島を誇りに思い、宮島の未来を創る児童生徒の育成～９年間のつながりを意識した持続可能な学習体系づくりを通して～

生活科・総合的な学習の時間におけるカリキュラム構築を通して、宮島を誇りに思い、宮島の未来を創る児童生徒を育成するための探究的な学習となる単元開発及び指導方法を研究する。

（２）資質・能力の設定について

小・中学校９年間で育成したい資質・能力と、それらが身に付いた児童・生徒像を次のように設定した。

おもてなし力 （知識及び技能）	宮島のことを地域の願いとともに深く理解し、伝えたい内容を構築していく
伝える力 （思考力・判断力・表現力等）	身に付けた知識・技能を活用し、相手や目的に応じて他者に伝えていく
見つめる力 （学びに向かう力・人間性等）	学習を通して自分と社会のつながりに気付き自己理解や将来への展望をもつ

これら３つの力を「おもてなし力（郷土愛）」「伝える力（整理・分析）（表現）」「見つめる力（主体性）（協働性）（将来展望）」の６つに分類し、発達段階に応じて系統を明らかにした資質・能力の系統表に整理した。

（３）取組について

昨年度の課題から重点取組を次の２点とした。

【今年度の重点取組】

① 地域資源を活かした単元の実践・改善

昨年度、生活科・総合的な学習の時間の学びの系統（縦のつながり）を明確にし、９年間の単元系統表（表１）を作成した。

表１　生活科・総合的な学習の時間　単元の系統表

	宮島学習 今ある姿を「守り・継承すべき」学びと体験 心豊かな暮らしを育む創造		生き方・あり方学習 生き方・あり方の 探究と創造
学年			キャリア発達
1	がっこうだいすき	いきものとなかよし なつがやってきた たのしい　あき　いっぱい （７年生とドングリの親子を結ぶ） ふゆをたのしもう	もうすぐ２年生
2	たんけん　はっけん　大すき宮島	生きものなかよし大きくせん ぐんぐんそだて　わたしのやさい	あしたへジャンプ
3	宮島の行事を伝えよう やさしい町　宮島を見つけよう 宮島の昔のくらしのよさを伝えよう		
4	宮島杓子のすばらしさを伝え隙	マイタイムラインをつくろう （８年生と昔を結ぶ）	10才のつどいで アップデートしよう
5	宮島伝統工芸展ちん会を開こう	宮島の海を守るために行動しよう 環境シンポジウムを開こう	自然の中で仲間と協力しよう パワーアップ中間生！
6	伝統をつなごう 宮島の歴史を発見しよう 宮島の町並みを伝えよう		未来の自分に手紙を書こう
7	伝統をつなごう	宮島の自然を守るために行動しよう （１年生とドングリの親子を結ぶ）	自然の中でリーダーとして 仲間と協力しよう 働くことを自分事にしよう
8	宮島の魅力★発見・発信 ・宮島を守るために昔を育てよう 伝統をつなごう　宮島★未来プロジェクト　（個人探究）		自分の適性と職業を 関連付けよう なぜ人々は働くのだろうか
9	・宮島を守るために昔を結ぶよう		自己のありたい将来を 自分なりに表してみよう

今年度は、これまで開発・実施した単元を充実させ実践することを通して、地域の課題、思いや願いをもとに児童生徒の地域貢献を目指す。

② ルーブリックを用いた指導と評価の一体化

評価の妥当性や客観性を高めるため、研究授業では児童生徒の具体的な姿から評価を行ったり、児童生徒の変容シートを持ち寄り互いの見取りを交流したりする。

自己評価だけでなく、相互評価やゲストティーチャーからの評価も取り入れる。

２　実践事例

（１）地域資源を活かした単元開発

宮島小学校第６学年「宮島の町並みを伝えよう」

・児童がゴールを決める単元構成

単元を通して「暮らしている人たちの思いをふまえて、町家を遺していくためには何ができるだろう」という問いを設定し、「１０年後の宮島の町家はどんな姿であってほしいか」を考えることから探究を始めた。児童は、自分たちがすべきことは「町家を遺してほしいと思う人を増やすこと」だと考え、対象を広げながら、繰り返し町家の価値を伝えていくことをゴールに決めた。

・多様な見方に触れる地域の方との連携

地域に出かけ、町家に住む人・店を営む人・保存活動に携わる人と対話を重ねることで、それらの人々の町家に対する思いに触れ、町家の課題や価値に対する考えを深めた。

取材活動の様子

また、観光客に町家の魅力を伝えるためのポスター制作には、地域のアマチュアカメラマンの方から撮影指導を受けた。

これらの本物との出会いにより、自分も地域の一員として町家の保存に関わるという社会への参画意識を高めた。

ポスター用写真撮影

・表現に対する他者評価

児童は次表のように、対象に応じて表現方法を変えて町家の価値を伝えていった。

発表の場	表現方法・○評価方法
１ 宮島文化発表会 （対象）児童生徒、教職員、保護者 地域の人	プレゼンテーション・歌とダンス ○Googleフォーム
２ 修学旅行生へのガイド （対象）京都大原学院６年生・先生	町家通りや歴史的建造物を案内しながら説明。○対話
３ 観光ポスター掲示 （対象）地域の人、観光客	校内投票で代表ポスターを選出し、A2版ポスターを島内に掲示。 ○Googleフォーム

それぞれの発表に対して評価を返してもらった。修学旅行生へのガイドは、対話から直接反応を知ることができ、宮島と他地域との相違点を考えることができた。発表では、自分たちの伝えたいことが相手に伝わったかどうかをアンケートで確認し、次の活動に活かすことができた。

作成したポスターの一部

宮島中学校第２学年「人々はなぜ働くのだろうか」

・職場体験学習を探究に位置付けた単元づくり

本単元は、「①働く意義や価値を探ろう」「②10年後の自分のビジョンを考えよう」の２つの小単元で構想し、小単元①に職場体験を行う。職場体験での学びをまとめて終わりとせず、自己の生き方をテーマに次学年の「生き方・在り方」学習に繋がる大きなテーマ設定とした。

体験前	自分にできることで人の役に立ちたいです。なぜなら、自分にできることで人の役に立つことができたらうれしいし、喜んでもらえると仕事への達成感を感じることができるからです。
体験後	私が思う「何のために働くのか」は、体験前の考えと自分の成長のためだと思います。理由は、仕事をすることで多くの人と関わり、礼儀などいろいろなことを学ぶ機会があり、自分の成長につながるからです。

生徒の「働くこと」に対する意識の変容　一例

・自分の考えを整理・修正する他者との対話

職場体験学習後、ゲストティーチャーと「１０年後の自分物語」を構想した。そして、１０年後の自分のありたい姿の実現に向け自分に何が必要かを考えて提言を作成した。

ゲストティーチャーとの対話

友達からのアドバイスを読む様子

そして、学級内で交流して相互にアドバイスをし合い、提言を練り直す学習を行った。例えば、「体験を具体的に書けば、就きたい仕事の理由に説得力が増す。」というアドバイスで提言を修正する姿が見られた。また、「既に自分ができることを書いたのは、なぜ。」という問いかけに答えることで、自分の考えを確かにしていく姿があった。

個人の提言づくりにおいて、このような他者との協働は、自分の考えを整理したり修正したりすることができ、将来に向けて今自分が何をすべきかを明確にしていくことができた。

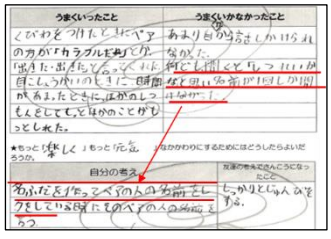
（２）指導と評価の一体化に向けた研修

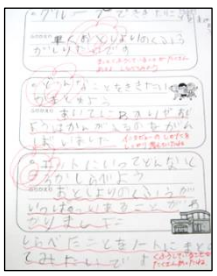
①　授業研究における評価規準と評価方法の検討

研究授業では、評価規準や評価方法を協議の一つとした。本時のねらいと単元における目標の関連を明らかにした上で、参観者がルーブリックをもとに児童生徒の個別評価を行い、ルーブリックの妥当性を検討し、必要な修正等を協議した。

②　振り返りシート・ワークシートを用いた変容の見取り

単元の中で授業者が見取りに用いた資料を持ち寄り、評価方法の研修を行った。





評価資料としたワークシート

目標と評価（付けたい資質・能力）に応じて、ワークシートや振り返りシートの設問を工夫すること、ルーブリックの設定の仕方を交流することができた。また、客観的な評価となるよう、ルーブリックを修正することもあった。

３　研究の成果と課題等

（１）成果

①（授業で）自分が伝えたいことを筋道立てて伝える力がついたと思います。　【伝える力】　(%)

	あてはまる	やや あてはまる	あまり	全く
７月	40.3	42.6	12.4	4.7
２月	39.0	47.2	13.0	0.8
変化	肯定的評価 82.9 → 86.2		否定的評価 17.1 → 13.8	

②授業の「ふりかえり」を通して、次にやりたいことを見つけています。　【主体性】　(%)

	あてはまる	やや あてはまる	あまり	全く
７月	34.1	40.3	17.8	7.8
２月	41.5	42.3	13.8	2.4
変化	肯定的評価 74.4 → 83.8		否定的評価 25.6 → 16.2	

③生活科・総合的な学習の時間で学んだ宮島のことを、他の人に伝えたいと思います。　【おもてなし力】　(%)

	あてはまる	やや あてはまる	あまり	全く
７月	51.2	36.4	10.1	2.3
２月	52.0	37.4	9.8	0.8
変化	肯定的評価 87.6 → 88.4		否定的評価 12.4 → 10.6	

①②から８割の児童生徒は「伝える力」「主体性」の高まりを自覚している。これらは、授業者が地域資源を活かした単元開発や振り返りの工夫に取り組んだ成果であり、発表場面で児童生徒が手応えを感じ、力の高まりを感じたからだといえる。実際に発表場面では、相手の質問や意見に応答し、自分の考えをしっかり伝える姿が見られた。

③から９割近い児童生徒が「おもてなし力」の高まりを自覚している。５割の児童生徒が「あてはまる」と回答したことは、宮島のことを伝えたいと「強く思う」表れである。これらは、地域の本物と出会い協働する中で、宮島への誇りや愛着の思いが強くなったからだと考える。また、振り返りシートには、児童生徒が地域の今後を考えたり、自身の行動・生き方を考えたりする記述が増えた。

（２）課題

単元実施に際し、児童生徒の思いや願いに沿うよう弾力的に活動を組むことで時間数の不足や、活動準備への労力が過大になる実態があった。

ルーブリック評価については、これまでの蓄積のもと設定の仕方や見取り方についてさらに改善していく必要がある。

（３）今後の改善方策等

実施してきた単元を引き継ぎながら、柔軟に運用できるように計画を立て、早めに地域連携を行っていく。また、中学校２・３年生の２年間継続で行う個人探究「宮島☆未来プロジェクト」は、２年間継続した３年生の報告会を終えたばかりである。これまでの活動や支援についての成果と課題を整理し、実践の定着を図っていく。

ルーブリックによる評価方法を改善して行い、指導者が児童生徒の資質・能力の変容を見取る力を高め、指導に活かしていきたい。